

山の本を楽しむ

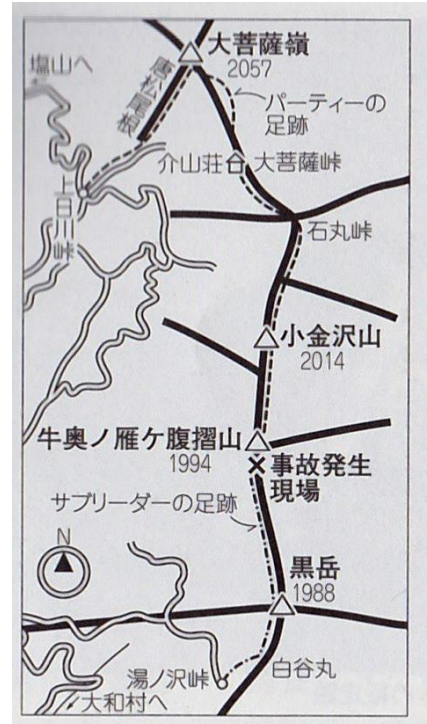
藤井 論

第15回 永田秀樹編「山の遭難 生きた、還った」—その2—

【突然の骨折事故】

1996年4月、まだ雪の残る大菩薩の南、小金沢連嶺で1件の骨折事故が発生した。パーティは東京のある山の会のメンバー7人。中高年とはいえ、それなりに山の経験を積んだ人たち、そして特に困難とは思えない一般登山道と、とてもトラブルが結びつかない条件下で、それでも事故は起きた。ごく普通の登山者が万が一事故にあった場合、どのように行動したらいいのだろうか。沈着なリーダーがまとめた自己報告には、トラブル発生後の対処法が具体的に記録されている。このような事故はだれにも起こりうるだけに、学ぶものは多い。

4月21日～22日、会の定例山行で男性4人、女性3人の7人パーティが大菩薩の小金沢連嶺縦走に向かった。平均年齢は61歳だった。1日目は大菩薩嶺まで登り、大菩薩峠の介山荘に宿泊した。2日目7時20分、介山荘を出て小金沢連嶺の縦走に入り湯ノ沢峠へと向かった。小金沢山を過ぎ、牛奥雁ヶ腹摺山に到着したのは10時40分。山頂で15分ほどの休憩を終えて、下りにかかった所（右図×地点）でTさんが突然転倒した。傾斜の緩やかな幅の広い稜線で、周囲にはオオシラビソの疎林が広がっており、登山道には少量の積雪があったものの、凍結はしていなかった。また木の根が張り出していたり、岩が出ていたわけでもなく、どうしても転倒する場所とは思えなかった。しかし転倒事故は起こり、本人は「骨が折れている。動かすとコトコト音がする」と言っていた。



幸いにもパーティの中には、保健婦とホームヘルパーだった2人の女性がいた。二人は応急処置として、真っ直ぐな木の枝を選び新聞紙を厚く巻いて副木とし、テーピング用の固定テープと日本手拭、バンダナなどで骨折箇所を固定した。その間に男性三人で対応を相談した。まず交替で背負って下りることを考えた。試しに交互におぶって歩いてみたが、ほんの数歩歩くのが精一杯であった。

戻って介山荘に救援を求めるか、南の湯ノ沢峠に向かうか、地図で比較すると湯ノ沢峠が近く、電話連絡が早くできる（当時はまだ携帯電話はない時代だった）。車道が通じているので車も使える可能性がある。リーダーの菅原文雄は先に一人で湯ノ沢峠に下りようとしたが、“リーダーが本隊から離れるのはまずい”と考え直し、サブリーダーのAさんに下りてもらうことにした。

Aさんが下り始めたのは11時30分、小走りにかなりの傾斜を飛ばし、何回かよろめいた。危うく転びそうになり、ハッと気がついた。もしここで自分が足をくじいたらどうなるのか。自分の任務は着実に下山し救助を要請することだ、と自覚し平静さを取り戻すことができた。幸いにも途中で車に出会って乗せてもらえ、電話ができたのが午後3時だった。ただちに塩山警察署大和派出所の警察官が駆けつけ、塩山署の課長も来て事情聴取が行われた。16時に塩山署の5人が車で湯ノ沢峠に向かった。一方でヘリが救助に向かったが、現場上空は雲に覆われ発見できない。地上班も日没が近くなり、夜を徹して現場に向かうという意見もあったが、**次の理由で翌朝に持ち越せる**こととなった。

(1) 負傷者の応急手当はほぼ万全で悪化の恐れはない。

(2) 今日ヘリが飛んだことで、救援活動が始まったことは現場のメンバーに伝わっているはずである。

(3) メンバーの構成、装備、食糧などから、一晩のビバークには充分耐えられる。

(4) 救助隊の夜間行動は登山道の凍結などによる危険が予想される。

一方の現場では、16時40分にヘリの爆音を聞いたが、雲が低く機影を確認できなかった。ヘリの音が消えると急にさびしくなり、リーダーの菅原を中心にビバーク体制に入った。まず、風を避けられるなるべく平らな場所を選んで、負傷者を収容した。介護は2人の女性が担当した。リーダーはまず焚き火から始めた。現場は標高2000mの稜線で、明け方の気温はマイナス10度前後になるはずだ。火を絶やすわけにはいかない。幸いオオシラビソの林には枯損木が多く、全員でなるべく多くかき集めた。

負傷者は焚き火のそばでザックを背に当てて寝かせたが、自力では微動もできない。火力は負傷者にちょうど良いように調整してやらねばならず、一晩中誰かが付いた。明け方の寒さは格別で、あたりの木々には霧氷がビッシリとついていた。

翌朝7時30分、頭上にヘリが現れた。同時に地上から警察署員が到着した。ホバリングしているヘリから救助隊員がスルスルと下りてきた。負傷者が動けないことを確認すると、もう1人の隊員と担架が降りてきた。負傷者が釣り上げられ、保健婦のYさんも同行のためリフトアップされた。

事故から学んだ教訓は次のものである。

① 事故は危険な場所だけで起こるものではない

転倒した場所はなんでもないところだった。負傷者は62歳だったが、10年の登山歴で西穂高から奥穂高へ縦走した経験もあり、技術的な問題はなかった。前夜の介山荘でもゆったり過ごし疲労はなかった。

② 中高年には荷物の軽量化が優先

負傷者のザックは14kgあった。中身はバーナー、ボンベ、カメラ、ダウン上下、酒のつまみ、果物など。登山靴も本格的な重登山靴。重い装備が転倒時の足に負荷を与えてしまった。軽量化に労と金を惜しんではいけない。

③ 登山届は必ず出す

今回の山行では登山届を出していなかったため、警察からたしなめられた。公的機関に救援を要請すると、全員の住所・氏名・年齢・負傷者の身長・体重などを聞かれる。これらがスラスラ出るような資料が必要となる。会の名簿を持参していると対応しやすい。

④ ツェルトを携帯すべき

今回はツェルトを持って行かなかった。風に体を直接さらすと体感温度は急激に低下する。パーティにツェルトは必ず必要である。

⑤ 装備について

ビバークしたメンバーは、全員ほぼ完璧な積雪期登山の装備を整えていたのが良かった。そのほかに今回役立った小物は、日本手拭、スキー用の手袋、毛糸の靴下、携帯カイロ、細紐、ウールのTシャツ、固定テープであった。

生還のポイント

しっかりした山岳会らしく、思いがけない事故にも冷静さを取り戻し、事故の連絡や、万全のビバーク態勢など優れた処置だった。救急法をマスターしたメンバーの存在も大きかった。

現在、菅原さんはGPSを積極的に活用している。歩いてきたコース、目的地までの距離なども表示されるので、道迷いも回避できるIT機器である。遭難の場合でも、正確に事故の場所を救援隊に伝えられ、救助ヘリのピックアップにも力を発揮することが期待できる。

(つづく)